



令和七年度 羽島市社会人権教育推進事業

「人権作文コンクール」

優秀作品集



「人権作文コンクール」優秀作品集

私たちは、幸せで明るい社会で暮らしたいと願っています。また、人権侵害のない明るい社会の実現は、私たちの永遠の願いです。しかし、私たちのまわりを見ると、まだまだ保障されているはずの基本的な人権が侵害され、偏見や差別に苦しんでいる人がいます。

「人権作文コンクール」は、このような社会の中で、児童・生徒一人ひとりが、今自分たちのまわりで人権に関して何が起きているのかを見つめ直し、自分たちは何をしなければならないのかをじっくりと考えてもらうために実施しました。

この作品集は、たくさんの応募作品の中から、特に優秀とされた児童・生徒の皆さんの作文を掲載したものです。子どもたちの人権に対する考えに耳を傾けていただくと共に、人権教育に関わるさまざまな場で活用していただければ幸いです。

【応募概要】

1. 作文内容

日常の家庭生活や学校生活あるいはグループ活動などの中で得た体験を通じて、基本的人権を守ることの重要性、必要性について気付いたこと、考えたことなどを題材とする。題名は自由。

2. 募集対象

市内の小学校、義務教育学校、特別支援学校小学部に在籍している5・6年生及び市内の中学校、義務教育学校7～9年生、特別支援学校中学部に在籍している生徒に相応する学籍または年齢にある者。

3. 応募総数

33点

(内訳)

小学5年生及び義務教育学校5年生	10点
小学6年生及び義務教育学校6年生	16点
中学1年生及び義務教育学校7年生	0点
中学2年生及び義務教育学校8年生	1点
中学3年生及び義務教育学校9年生	6点

4. 審査員

羽島市社会人権教育推進協議会委員10人、生涯学習課長

5. 賞の授与等

最優秀賞2点、優秀賞3点、入選9点

入賞者に表彰状と副賞を授与、最優秀賞及び優秀賞作品を人権作文集に掲載

目次

最優秀賞

何かお手伝いすることはありますか	足近小学校五年	尾畑 みのり	1ページ
“名前”に気付かされたこと	中島中学校二年	足名 奏音	3ページ

優秀賞

「ふつう」ってなんだろう。	竹鼻小学校六年	伊藤 一花	5ページ
いじめをなくそう	竹鼻小学校六年	黒田 和奏	6ページ
人権を守る	中央中学校三年	白井 悠賀	7ページ

(敬称略)

最優秀賞

何かお手伝いすることはありますか

足近小学校 五年 尾畑 みのり

休みの日にショッピングモールへ出かけたときに、車いすに乗っている子どもを見かけました。その子は一人では動けないようで、家族に手伝ってもらいながら買い物や食事をしていました。わたしはふと思いました。「あの子はどうやって学校に通っているんだろう。」家に帰り、インターネットで調べてみました。その中で、一つ気になる古い記事を見つけました。「保育園行つていいんだね」という題名の記事です。記事に出ていた女の子は、定期的にたんの吸引が必要のため、保育園への入園を断られていたのです。わたしはショックを受けました。病気やケガ、その他にも発達障がいであるという理由で学校や保育園へ行く権利をうばわれてしまうことがあるんだと知りました。きっと他にも同じように悲しい生活をしている子や、理不尽な思いをしている子も、少なくないと思いました。このことからわたしは、二つの問題を考えました。

一つ目は、障がい者だって人権があるのに、なぜ保育園に行くことを認めてもらえないのかということです。人権は人が人として、自由に考え、行動し、幸せにくらせる権利です。なのに保育園にも行けず、十分な教育が受けれていないことが実際にあります。健康な人たちと同じように、

ということはむずかしいと思います。でもどうにかして受け入れる方法はあるのではないかと思います。

二つ目に、人権侵害はどうしたらなくなるのか。障がい者の人権はどうしたら守れるのかということです。障がい者と聞いただけで、大変そうとか何もできなさそうとか勝手な印象で決めつけがちです。でも、障がいにもいろいろあつて、その人によつて病気だったりケガだったり全然ちがいます。まずは障がいについて理解を深めることからだと思います。

「保育園行つていいんだね」という記事は二十年前の話です。これまでに法律が変わったり社会が変わったりしても、このような問題は今もあります。もつと「何か」が変わらないと解決しない問題なんだと思いました。わたしはこの「何か」とは「みんなの思いやる気持ち」だと考えます。みんなが困っている人を助けてあげたいと思えば解決につながると思います。わたしは去年、ケガで一ヶ月ほど松葉づえをついて生活していました。今まで当たり前でできていたこともできなくなり、とても不自由でした。でもそんなわたしを見て周りのみんなが手助けをしてくれました。「何か」の答えをみんなが教えてくれた瞬間でした。相手のことを思い、何に困っているのか考えて行動することが、とても大切なことなんだとわかりました。

障がい者の人権を守るということは、むずかしいように思われますが、そうではなくてやろうとしないだけだと思います。「何に困っているのかな。」「何かわたしにできることないかな。」と考え行動すれば、少しずつ社会も

変わっていくんだと思います。そのために、まずはわたしが困っている人がいたら声をかけることから。
「何かお手伝いすることはありますか」

「名前」に気付かされたこと

中島中学校 二年 足名 奏音

「名前は、丁寧に書きましょう。」

ある日の授業中に、先生が皆のプリントを見ながら言った。そして続けて、こう言った。

「名前は、生まれてきて初めて貰う大切なものだから、下の名前だけや、名字だけではなく、フルネームで書きましょう。」

僕は今まで、名前について、あまり気にしたことがなかったけど、この時の先生の言葉が、改めて名前について考えるきっかけになった。

日常を振り返ってみると、フルネームで呼ばれることは少なく、下の名前で〇〇さんと呼ばれたり、あだ名や呼び捨てで呼ばれることが多い。僕はサッカーをやっている、チーム内では学年問わず、お互いに呼び捨てで呼び合っている。

あだ名や呼び捨ては、話しかける時、相手にどういう印象を与えるのだろうか。例えば、サッカーの時には、学年を越えて呼び捨てで声をかけ合うので、チームの一体感により強くなるように感じる。日常の中でも、仲の良い友達同士が、呼び捨てやあだ名で呼び合う様子は、特別な感じがする。僕自身も、呼び捨てやあだ名で呼び合っていると、相手に、より親しみを感じて、心の距離感も縮まったように思える。

一方で、外見や性格に関したあだ名で呼んでいるのを見

かけることもある。呼ばれている本人は嫌がっているかもしれない。でも、遊び感覚を交えた軽いノリと勢いで、そのあだ名が広まっていくこともある。傷つく呼び名で呼ばれ始めても、その場のふざけたノリで始まったことを、やめてほしい、とはなかなか言えないのかもしれない。呼ばれたその人は、本心では傷付いていて、やめてほしくても、数人でふざけている様子は一見楽しそうに見えてしまう。だから周りも、その人が傷付いていることに気付きにくい。そして、相手を傷付けてしまうあだ名を言い始めた人は、普段から、ちよつとした悪ふざけを許してくれている相手だったら、このくらいならふざけてもいい、と思ひ込んでしまっているんだと思う。

ここで僕は、授業中に先生が言った言葉を思い返してみた。「名前は、生まれてきて初めて貰う大切なもの」という言葉にあるように、名前は、生まれてきて一番最初の、親から僕達へのおくりものだ。そして名前は、生まれてから年を取っても、ずっと、その人自身のものとして呼ばれていく。愛情や親しみを込めて、呼び捨てやあだ名で呼ばれることが嬉しい人もいると思う。僕の二人の祖父においては、子供の頃からずっと、名前の二文字を取って、けんちゃん、みきちゃん、とあだ名で呼ばれていたまま、おじいさんになった今も、そう呼ばれている。僕にとって、二人の祖父を名前で呼ぶことはなく、「じいちゃん」といつも呼んでいる。でも、「けんちゃん」「みきちゃん」と親戚や近所の人から呼ばれている祖父達を見ると、呼ぶ人と呼ばれている人の距離の近さが感じられる。そこには、

僕が知らない、祖父の今までの人生があつて、一人の人として、周りの人から大切にされてきたんだなあ、と思った。全ての人が、この世に生まれた時から持っているのが「人権」だ。そして親が、その人だけの、この世に一つしかない「命のあかし」として、名前を付けてくれる。僕達は皆、一人の人間として命が守られ、幸せな社会生活を送る権利を持っている。人権も、全ての人、一人一人にあつて、誰かにあげることも貰うこともできない、その人だけの権利だ。

心も体も、誰にも傷付けられることなく、一人一人が自分らしく生きていくために、出来ることがあると思う。今回、名前と人権について考える機会を貰って、気付いたことがある。呼び捨てでも、さん付けでも、あだ名でも、大切なのは、相手を尊重する気持ちを忘れないことではないだろうか。それは、親しくても、相手が年下でも、一緒にプレイするチームメイトでも、どんな場合においてもだと思う。相手との、適度な心の距離感を意識することが、時に、相手への礼儀となり、相手を尊重した行動につながると思う。

僕の周りにも色んな人がいる。呼び方一つとっても、名前前で呼んでほしい人もいれば、あだ名では呼んでほしくない人もいるだろう。僕の心が、僕にしかないように、皆それぞれ心の持っている、感じ方もそれぞれ違う。僕達は一人一人違う人間なのだから、それでいいんだ。その違いを認め合い、尊重することが大切なんだと思う。僕も、心の距離感と相手を尊重することを忘れずに、これから

周りの人と仲良くしていきたいと思う。そして、親から貰った「奏音」という名前を大切に、自分らしく生きていきたい。

優秀賞

「ふつう」ってなんだろう。

竹鼻小学校 六年 伊藤 一花

「ふつうってなんだろう？」私はこの言葉についてよく考えることがあります。

たとえば、「ふつうは朝ごはんを食べるよね」、「ふつうはもつと大きな声で発表するよね」など、私たちの生活の中では「ふつう」という言葉を何気なく使っています。

でも、その「ふつう」はだれが決めたものなのでしょうか。

人はひとりひとり考え方や感じ方もちがい、個性があります。育った場所、家族のたち、得意な事や苦手なこともバラバラです。例えば、私は図工が得意だけど、体育は苦手です。でも、ちがうあの子は、体育が得意で、図工は苦手。そういった中で、「ふつう」を一つにしばってしまふのは、少しちがうのではないのでしょうか。

男女差別もそうだと思います。女の子はピンク色・スカート・リボンや可愛い物。男の子は、青色・ズボン・カッコいい物というイメージが「ふつう」になっていると思います。ですが、今の世の中のふつうが変わってきています。今は、制服でも女の子がズボンかスカートを選べるようになってきているし、男の子がピンク色の服を着てもいいし、

女の子が戦隊ヒーローが好きでもいい。「男の子だから」、「女の子だから」という枠にとらわれず、自分らしさその人らしさを大切にひとりひとりが自分らしく生きていくことが大切なんじゃないかなと思います。

もし、あの子にとつての「ふつう」が私にとつてちがっていたら？逆に私にとつての「ふつう」があの子にとつてちがっていたら？そのとき、「あなたは変だよ」、「それっておかしいと思わない？」と言ってしまうのはその人の大切な考え方や生き方を傷つけてしまうかもしれません。私は、人のちがいを考え方を「まちがい」や、「おかしい」と思うのではなく、「そういう考え方もあるんだ」と思える人でありたいです。

人はだれもが「自分らしさ」を持っています。その「自分らしさ」がまわりとちがっていても、私は自信を持っていいと思います。そして、まわりの人との「ちがい」を認め、大切にできる社会になれば、もつとすてきでやさしい世界になるのではないかなと思います。

私はこれからも「ふつうってなんだろう。」と問い続けながら、人のちがいを大切にできることを育てていきたいです。そして、人との「ちがい」を認め、「個性」を認め、自分の「考え」や、「生き方」を大切に、自信を持てる人になりたいです。

いじめをなくそう

竹鼻小学校 六年 黒田 和奏

私は最近、いじめで心にきずが残ってしまった人の新聞記事を目にしました。その記事から、いじめられることのつらさや、人と関わることがこわくなる気持ちがよくわかりました。

実は私も、いじめを経験したことがあります。今でもその時のことを思い出すと悲しくて、なみだがあふれてきます。話しかけてもこたえてくれなかったり、かげで悪口を言われたりしました。仲間はずれにされたこともありました。そのようなことが続いて、自分に自信がなくなり、授業に集中できなくなったり、自分の性格や言葉、行動に悪いことがあったのではないかと考えて自分をせめてしまうこともありました。それから一人で過ごすことが多くなつて、楽しかった学校にも行きたくなくなりました。そこで私は、勇気を出して学校の先生や家族に相談しました。話を聞いてくれる人がいるということがわかって心が少し軽くなりました。そして、アドバイスをもらって、「やってみよう」という前向きな気持ちになりました。

また、友達にも、私と同じように悪口を言われている子がいきました。その子は、それまでとても明るい子だったのに、だんだんと笑顔が減り、元気がなくなっていきました。友達との関わりが少なくなっていたので、私の経験をいかして、その子が少しでも楽になるように話を聞いてあげた

いと思いました。話を聞いてあげると、前よりも少しずつ元気になっていった、今では私に何でも話してくれるようになりました。

私は、いじめをする人の気持ちを知りたくて、タブレッツで調べてみました。いじめをする人の気持ちは主に二つあるそうです。一つ目は、自分に自信がなく、ほかの人をいじめることで、自分がすぐれていると思いたい気持ちです。二つ目は、ほかの人をうらやましいと思う気持ちです。しかし、いじめられた人は、時間がたつてもつらいことを思い出してしまいます。いじめをした人も、まわりの人から信用されなくなって、後かいするかもしれません。そして、まわりで見ていた人も決して良い気持ちにはなりません。

私は、いじめを経験するまで深く考えたことはありませんでした。でも今は、いじめは絶対にしてはいけないことだと強く思っています。なぜなら、だれにとつてもよくないことだからです。いじめをなくすために、私達ができることは、「いじめを許さない空気」をつくることだと思えます。いじめを見て見ぬふりをすることは、いじめをすることと同じです。これから、私のようにつらい思いをする人が少しでもいなくなるように、いじめを見つけたら必ず声をかけて、みんなが安心して学校生活を送れるようにしたいです。

人権を守る

中央中学校 三年 白井 悠賀

僕たちは日々の生活の中で「人権」という言葉を耳にすることがあります。学校の授業、ニュースなどさまざまな場面で使われていますが、「人権とは何か」と聞かれた時に、はつきりと答えられる人は多くはいないと思います。人権とは、人が生まれながらに持っている、自由で幸福な生活を送るために欠かすことのできない固有の権利のことです。国籍、性別、年齢、文化や考え方の違いに関係なく、すべての人に等しく与えられているものです。

昔は多くの差別が起きていました。例えば、えた・ひにんと呼ばれる人たちが住む場所や職業を制限されたり、女性だけ選挙権がなかったりと、現代では考えられないような差別がありました。しかし、それに違和感を感じた人たちが行動を起こして、少しずつ状況は変わっていききました。その結果、今は昔よりも平等で自由な社会の中で暮らすことができています。

しかし、現代も人権が完全に守られているとは言えません。いじめやネット上での誹謗中傷、外国人や障がい者への差別など、僕たちの周りにも多くの問題があります。僕たちが気づかないうちに、誰か傷ついている人がいるということは少なくありません。人権が侵害されると、被害者は深く傷つき、心に大きな傷を受け、生活にも大きな影響が及びます。いじめられた人が学校に通えなくなったり、

ネットで誹謗中傷を受けた人が自信を失ってしまったりもします。このようなことが続くと最悪の場合、自殺という選択をする人が出てしまう可能性があります。

そこで、僕たちが人権を守るためには何ができるでしょうか。一番大事なのは、「相手の立場になって考えること」だと思います。相手の気持ちを想像して、「自分が同じことをされたらどう思うか」を考えることで、自然と相手との関わり方も変わってくると思います。例えば、クラスに誰からも話しかけられていない子がいたとき、「その子がどんな気持ちでいるか」を考えます。そして、自分から話しかけてみれば、その子は少しでも救われるかもしれません。また、僕たちには行動する勇氣も必要だと思います。もし、身近で差別やいじめを見かけたとき、「自分もいじめの被害者になるかもしれない」と、見て見ぬ振りをするのではなく、その行動が間違っているということを勇氣を出して伝えることができるかどうかが重要です。しかし、状況によっては行動に移すことが難しい場合もあると思います。そのような時には、先生や親など、身近な大人に頼ることも「人権を守る」ことの一つです。

そこで自分自身の、日々の小さな言葉遣いや態度にも気をつけてください。何気なく使っている言葉が、相手を傷つけたりしていることがあります。誰かに自分についての悪口を言われると、とても傷つくと思います。それほど、言葉には強い力があります。その力を人を傷つけるためではなく、人を褒めたり、励ましたりすることなどに使うと、とても良いと思います。

人権を守るということは、とても難しいことだと思うかもしれません。しかし、人に優しく接する、相手との違いを認める、困っている人に手を差し伸べる。そうした一つ一つの小さな行動の積み重ねが、人権を守ることに大きく関わっています。自分が直接関わっていなくても、誰かのために行動することができる人が増えることで、少しずつ現状は変わっていくと思います。

このように、人権は守り続けられなければいけないものです。僕たち一人ひとりが意識をして、生活していくことが大事だと思います。そのために僕は、前に述べたように、相手の立場になって考えることや、自分の言動に気をつけて生活していきたいです。そして、いじめや差別に悩む人が少しでも減ったら嬉しいです。

羽島市市民協働部

生涯学習課

羽島市竹鼻町 55 番地

TEL 058(392)1111

令和 7 年 11 月